

補助動詞やりもらい文における助詞について

山 田 仁 子

Particles with Auxiliary Verbs of Giving and Receiving in Japanese

Hitoko YAMADA

Abstract

Auxiliary uses of the Japanese verbs, *youtu* and *morau*, are metaphorical extension of their lexical uses meaning 'give' and 'receive'. Auxiliary uses interpret events as metaphorical gift giving, while lexical uses describe actual movement of an object or transfer of possession. This paper examines particles to present metaphorical receivers in a sentence with auxiliary *youtu* 'give', and particles to present metaphorical givers in a sentence with auxiliary *morau* 'receive', to investigate the relation between the verbs of auxiliary use and their preceding verbs.

Particles attached to metaphorical receiver and giver often differ from those attached to physical ones. They basically correspond to the roles of participants in the action or event the preceding verb describes, and sometimes to the role of target or source of some object transfer, which the preceding verb does not indicate. The combination of the two kinds of verbs produces this transfer. The preceding verb builds a space of an actual action or event and the auxiliary *youtu* or *morau* builds a space of image, i.e. the image schema of giving and receiving. These two spaces integrate to produce a blended space, sometimes with an object from the space of preceding verb combined with directionality from the space of image schema of giving and receiving. Particles present metaphorical receiver and giver as participants in this blended space. This observation indicates the possibility that the two spaces to be compared in metaphor in general interact to produce a blended space.

序。

補助動詞ヤル、モラウは、物のやりとり、いわゆる授受を表す本動詞ヤル、モラウから比喩的に派生した用法である。先行する本動詞の後に助詞テにより結び付き、先行動詞部分が表す行為の比喩的授受を表す。比喩とはいえ、授受という枠における受け手、与え手という役割を担う事物を提示する助詞は、本動詞ヤル、モラウが表す物理的物の授受における受け手、与え手を提示するものと同種であると予想される。しかし補助動詞には、本動詞の場合にない先行動詞が存在する。行為の比喩的受け手、与え手は、また同時に先行動詞が表す物理的行為における参与者でもあるから、助詞がこの物理的役割に対応する可能性もある。本稿では、補助動詞ヤルに対する比喩的受け手、モラウに対する比喩的与え手を提示する助詞について考察し、補助動詞と先行動詞がいかに助詞決定に関わるのか明らかにしていく。

一章では、補助動詞ヤルに対する受け手を提示する助詞について、特に“に”を中心に検討する。二章では、補助動詞モラウに対する与え手を提示する助詞について、特に“から”を中心に検討する。三章では、助詞の現れ方から、補助動詞を含む文における補助動詞と先行動詞の関係、ひいては、比喩において喩えるものと喩えられるものの関係を探る。

1. 補助動詞ヤルに対する受け手を示す助詞

本動詞ヤルを含む文においては、助詞“に”が授受により移動する物の受け手を提示する。このことから、補助動詞ヤルを含む文においても助詞“に”が行為の比喩的受け手を提示すると予想される。(1)(2)の文はこの予想を支持するように見える。(1)は本動詞(2)は補助動詞のヤルを含む文であるが、どちらも助詞“に”が物あるいは行為の受け手“花子”を提示している。

(1) 太郎は花子に花をやった¹⁾

(2) 太郎は花子に花を送ってやった

しかし補助動詞ヤル文において、比喩的受け手は常に提示されるとは限らず、提示される場合も、助詞は“に”であるとは限らない。次に挙げる例(3)～(6)で受

1) 出典を示していない例文は筆者の創作である。なお議論の中で問題となる助詞及び補助動詞には下線を施した。

け手は助詞により直接提示されることはなく、ただ文脈から間接的に推察される。(3)(4)では聞き手、(5)では“女”，(6)では“パパ”であろう。これら受け手の提示部分は本来存在するものが省略されたわけではない。(3)における比喩的受け手、すなわち聞き手を“許す”という行為自体の受け手として、例えば“おまえを”と“を”格で提示することは可能である。しかし(4)(5)(6)については、助詞による直接的な受け手の提示は考えられない。本動詞ヤルが表す物の授受の受け手が、省略される場合があるにせよ、常に“に”格で提示可能な状態で存在するのにくらべ、補助動詞ヤルの比喩的行為授受の受け手は、補助動詞ヤル文の構成素として不確かな位置しか占めないと言えよう。

- (3) 今日は許してやる (『花埋み』, 288)
- (4) 言い残すことがあったら聞いてやるぞ (『女社長に乾杯!』, 598)
- (5) 濡れ手拭でもこさえて、女の顔を拭いてやるとしようか
(『砂の女』, 229)
- (6) パパをここへつれてらっしゃいよ！引っかけ傷で人相を変えてやるから！
(『女社長に乾杯!』, 211)

補助動詞ヤルの受け手が明確に提示される場合、助詞は、補助動詞ヤルの受け手が先行動詞部分の表す行為に、いかに関わるかによって決定する。

まず補助動詞ヤルの受け手が、先行動詞部分の表す行為に直接関わらない場合について検討する。この場合は更に、行為による恩恵が表されるか否かにより助詞の用いられ方が異なる。行為から受け手が感じる恩恵が表されるならば、説明的表現である“のために”がヤルの受け手を提示する。(7)において受け手は先行動詞、補助動詞それぞれに存在する。花子が太郎に算数を教える場面に、太郎の母親は登場しない。先行動詞が表す行為の直接の受け手は太郎であり、太郎の母親は行為をただ喜ぶだけ、つまり行為の恩恵を受けるだけである。先行動詞の受け手“太郎”は助詞“に”で、補助動詞ヤルの受け手“太郎の母親”は“のために”で提示される。

- (7) 花子は太郎の母親のために、太郎に算数を教えてやった

補助動詞ヤルは、常に行為の恩恵を表すとは限らない。これは先に挙げた例(6)からも明らかである。ヤルの受け手が先行動詞の表す行為に直接関わらず、かつヤルが恩恵を表さない場合には、ヤルの受け手を直接に提示することはで

きない。(8)において“太郎の犬をける”という行為が太郎に心理的影響を与えることをヤルは示すが、行為の比喩的受け手として“太郎”をことさらに提示することはできない。

(8) 僕は太郎の犬をけてやった

次に、補助動詞ヤルの受け手が、先行動詞部分の表す行為に直接関わる場合について検討する。関わり方はさまざま考えられるが、まず、行為を直接に受ける場合を検討する。(7)の文に表された“花子が太郎に算数を教える”という行為は、“太郎”がその直接の受け手である。この行為が行為の受け手“太郎”自身のためである場合、補助動詞ヤルを用いた文は(9)のようになる。“太郎”は先行動詞の表す行為の場面において行為の受け手であり、かつ補助動詞ヤルの受け手でもある。両動詞の受け手が一人の人物で一致している。先行動詞“教える”という行為に対する受け手を示す助詞は“に”，授受の受け手を示す典型的な助詞も“に”で一致する。当然，両動詞の受け手である人物“太郎”は助詞“に”で提示される。

(9) 花子は太郎に算数を教えてやった

同様の例をいくつかここに挙げておく。(10)(11)(12)において、行為の受け手と補助動詞ヤルの受け手は一致しており、この受け手は助詞“に”で提示されている。行為を表す先行動詞に対する受け手を示す助詞は、ヤルを含まない(13)(14)(15)に見るように“に”である。

(10) 花子は太郎に送金してやった

(11) 花子は太郎に手紙を書いてやった

(12) 花子は太郎に手をふってやった

(13) 花子は太郎に送金した

(14) 花子は太郎に手紙を書いた

(15) 花子は太郎に手をふった

上に見た例(9)～(12)だけでは、補助動詞ヤル文において受け手を示す助詞が、先行動詞を受けたものなのか、補助動詞ヤルを受けたものなのか判然としない。

ここで、行為の受け手に“に”以外の助詞をとる動詞が、先行動詞である場合について検討する。

補助動詞ヤルを含む文(16)(17)において先行動詞の受け手と補助動詞ヤルの受け手は同一人物で一致する。しかし先行動詞に対する受け手を提示するのは、これまでの例と異なり、(18)(19)に見る助詞“を”である。この場合補助動詞ヤル文において受け手を提示するのは、先行動詞を受けた助詞“を”となる。補助動詞が表す授受の枠組みに合う助詞“に”は、この場合使用不可能である。

(16) 花子は太郎を/*にほめてやった

(17) 俺はおまえを/*に殺してやる

(18) 花子は太郎をほめた

(19) 俺はおまえを殺す

(20)において、“子供”は先行動詞部分が表す場面の中心に登場する。この人物はまた、補助動詞ヤルの受け手である。その提示には先行動詞に対応した助詞が用いられ、授受の枠に合う助詞“に”は用いられない。補助動詞が含まれない場合(21)と同じ助詞“と”となる。

(20) 花子は子供と/*に遊んでやった

(21) 花子は子供と遊んだ

次に、補助動詞ヤルの受け手が、先行動詞部分の表す行為の直接の対象として表現されない場合について検討する。(22)(23)における補助動詞ヤルの受け手は、行為の直接の対象そのものではなく、行為の直接の対象にとっての所有者である。つまり(22)(23)において行為の直接の対象はそれぞれ“話”，“服”だが、補助動詞ヤルの受け手は、これらを所有する“太郎”，“真弓”である。補助動詞ヤルの受け手に付く助詞は、補助動詞を含まない(24)(25)と同様、所有格の“の”であり、この場合も先行動詞に対応したものと言える。

(22) 花子は太郎の話を聞いてやった

(23) 花子は真弓の服をほめてやった

(24) 花子は太郎の話を聞いた

(25) 花子は真弓の服をほめた

(22)(23)における先行動詞が表す行為の直接の対象は、“話”や“服”といった“物”であった。だが(26)(27)のように対象が人物の場合でも、先行する所有格“～の”に現れる別の人物が、補助動詞ヤルの受け手になり得る。先行動詞部分の表す行為の直接の対象にとって密接な関係にある人物が所有格で現れ、かつ、補助動詞ヤルの受け手になる。(26)におけるヤルの受け手は“太郎”，(26)におけるヤルの受け手は“友達”と解釈される。

ただし、行為の対象が人物の場合、文の論理的解釈としては、行為の受け手がヤルの受け手である可能性は残る。補助動詞ヤルの受け手とは、ヤルが表す抽象的な行為の移動(この移動が場合によって恩恵や被害といった解釈を伴う)を受けると感じる存在であるから、人物の方が物質よりも受け手になりやすい。更に人物の性質によっても、受け手のなりやすさには差がある。(26)と(27)を比較すると、(26)の“太郎の娘”の方が(27)の“友達の赤ちゃん”よりもヤルの受け手として解釈されやすい。行為からの心理的影響を受け、行為の抽象的授受を感じることでできる能力の差による違いと考えられる。²⁾

(26) 花子は太郎の娘に算数を教えてやった

(27) 花子は友達の赤ちゃんのお守りをしてやった

以上検討してきた例についてまとめると、いずれも、補助動詞ヤルを含む文においてヤルの受け手を提示する助詞は、ヤルを含まない文において先行動詞部分に現れる助詞をそのまま受け継ぐ形となっている。補助動詞ヤルの受け手を提示する助詞は、以上の例については先行動詞部分で全て説明できる。

ところが、先行動詞だけでは説明できない例が存在する。次の補助動詞ヤルを含む文(28)(29)(30)は、助詞“に”をそのままに補助動詞ヤルを除くと(31)(32)(33)で非

2) 例(26)等、所有格が付く人物が、先行動詞の行為の対象になっている補助動詞ヤル文の場合、ヤルの受け手としては、本文で論じるとおり、2通りの解釈があり得る。(26)ならば“太郎”と“太郎の娘”である。解釈のされやすさは、本文で述べた名詞の性質に加え、Kuno (1987, p.203) が提唱する「感情導入」(empathy) も関係すると思われる。所有格を含む名詞句では所有格部分に「感情導入」が置かれやすい。つまり話者あるいは主語の人物は感情的に、名詞句全体が指示する人物よりも所有格部分の人物の方に近いと考えられる。補助動詞ヤルが表す主観的行為の移動が目指す方向として、動作主の視野に入るのは、「感情導入」が置かれる所有格部分の人物である可能性が高い。よって所有格部分の人物はヤルの受け手になりやすい。

文となる。つまり(28)(29)(30)において補助動詞ヤルの受け手を提示している助詞“に”は、先行動詞部分から受け継いだものではない。³⁾

(28)(29)(30)に共通する特徴は、先行動詞部分だけでは見られなかった“物の移動”が表されている点である。そもそも助詞“に”は、接続する名詞が指示する対象物への移動あるいは働きかけといった方向性を示す。補助動詞ヤルのつかない(31)(32)(33)の動詞部分“時刻表を書く”“似顔絵を描く”“缶ジュースを開ける”だけでは、何の移動、方向性も感じられない。それが補助動詞ヤルがつくと、“時刻表”“似顔絵”“缶ジュースの中のジュース”に動きが生じる。その動きの先が助詞“に”によって示されるのである。

- (28) 係員はその紳士に時刻表を書いてやった
- (29) 花子はボーイフレンドに似顔絵を描いてやった
- (30) 父親は子供に缶ジュースを開けてやった

- (31) *係員はその紳士に時刻表を書いた
- (32) *花子はボーイフレンドに似顔絵を描いた
- (33) *父親は子供に缶ジュースを開けた

なお次の(34)は、(28)(29)と同じあるいは類似した動詞を先行動詞に持ち、かつヤルの受け手は助詞“に”で示されるが、補助動詞ヤルがなくても、(35)のように助詞“に”が用いられる。“手紙を書く”という先行動詞部分が表す行為において既に、行為の受け手“手紙”の移動、方向性が見られるからである。

- (34) 花子は離れて暮らす息子に手紙を書いてやった
- (35) 花子は離れて暮らす息子に手紙を書いた

(28)(29)(30)において、補助動詞ヤルがつくことにより動きが生じる物は、明確に文中に現れていたが、動きを生じる物が明確に言語表現として現れない例もある。(36)の補助動詞ヤル文は(28)(29)(30)と同様、ヤルを含まない文(37)において助詞“に”の使用は不自然だが、補助動詞ヤルが付くとその受け手は助詞“に”により自然に提示される。文の解釈としては、花子がドアを開けた後、太郎がドアを通

3) 補助動詞ヤルがない文では助詞“に”が用いられないのに、補助動詞ヤルがつくと助詞“に”が用いられるようになる現象の存在については、Maeda (1994, p.26)が指摘している。

って外に出ていくか中に入ってくるという状況が想像される。ここで助詞“に”を使用可能にする動く物の存在は、明確な表現としては示されない。“ドア”は動きはするが、受け手“太郎”へと向かう方向性を持つとは限らない。(36)で動きを生じるものは抽象的である。受け手“太郎”へ方向性を持って届くのは、ドアの外の自由かあるいはドアのこちら側の部屋で花子と共に過ごすことと考えられる。先行動詞が表す行為の結果受け手に起こる新たな事態が、受け手に向かう動きを生じるものとして、助詞“に”の使用を可能にしている。

(36) 花子は太郎にドアを開けてやった

(37) *花子は太郎にドアを開けた (Maeda 1994, p.26)

以上の考察により、補助動詞ヤルの受け手を提示する助詞が、補助動詞だけでも先行動詞部分だけでも説明できないことが明らかになった。(27)までの例については、先行動詞部分が表す場面というものが先に存在し、この場面に関わる事物は先行動詞に対応する助詞で提示され、その場面についての主観的解釈を表すために補助動詞ヤルが付加されると説明できる。しかし(28)以降の例については、補助動詞ヤルが場面についての主観的解釈を表しながらも、場面描写そのものにまで関わっている。動きを示す助詞“に”は、補助動詞ヤルが先行動詞と相互に働いて場面における物の方向性という新たな意味を生み出す可能性を示唆している。

2. 補助動詞モラウに対する与え手を示す助詞

本動詞モラウを含む文における与え手は、(38)(39)に見るように、助詞“に”あるいは“から”により提示される。補助動詞モラウを含む文における与え手（物理的行為における動作主）も、(40)(41)では同じ助詞“に”、“から”により提示されている。補助動詞モラウが本動詞モラウから派生したことを考えれば、用いられる助詞が同一であるのは自然なことに見える。

(38) 花子は太郎に花をもらった

(39) 花子は太郎から花をもらった

(40) 花子は太郎に花を送ってもらった

(41) 花子は太郎から花を送ってもらった

しかし、補助動詞の場合、モラウに対する与え手は、助詞による明確な提示を常に受けるとは限らず、また提示される場合も、助詞は“に”、“から”とは限らない。前章で補助動詞ヤルに対する受け手を提示する助詞に関して見られたと同様の状況が、補助動詞モラウに対する与え手を提示する助詞についても見られるのである。

文脈により与え手が明らかな場合には、モラウに対する与え手は助詞による提示を受けない。(42)(43)においては、文の前半部分に動作主、“福岡署”と“床屋の女房”が現れ、その後モラウの与え手として新たな助詞による提示を受けることはない。

- (42) 三原はいちおう福岡署に連絡して、二十一日の市内の受付電報を調べてもらうことにした。 (『点と線』, 343)
- (43) ようやく床屋の女房に頼んで米を一合余りわけてもらい,... (『ラ・クンパルシート』, 366)

(42)(43)においてモラウに対する与え手をあえて提示しようとする、(44)(45)のように助詞“に”を用いることはできるが、助詞“から”は、(46)(47)に見るように(42)については用いられず、(43)についてのみ用いられる。

- (44) 福岡署に二十一日の市内の受付電報を調べてもらうことにした。
- (45) 床屋の女房に米を一合余りわけてもらい,...
- (46) *福岡署から二十一日の市内の受付電報を調べてもらうことにした。
- (47) 床屋の女房から米を一合余りわけてもらい,...

補助動詞モラウに対する与え手につく助詞は、“に”、“から”以外にもあり得る。次に挙げる(48)(49)において補助動詞モラウの与え手にあたる名詞句に付く助詞は、それぞれ“を”、“が”となっている。これは助詞が文中のモラウ以外の部分に対応した機能を担っているからと考えられる。(48)の助詞“を”は動詞“思う”の目的語を示し、(49)の助詞“が”は動詞“重ねる”の主語を示す。

- (48) なああ大吉、おかあさんはやっぱり大吉をただの人間になってもらいたいと思うな。 (『二十四の瞳』, 346)
- (49) 「去れ、行きて汝のなすことをなせ」私が今、キチジローにその言葉を言えぬのは,... 彼が、裏切りの上に裏切りを重ねてもらい

たくないという希望と期待があるからでした。 (『沈黙』, 204)

(48)(49)の助詞に、補助動詞モラウに対する受け手の提示の役割を優先させることもできる。ただしこの場合、(50)(51)のように助詞“に”を用いることは可能だが、(52)(53)のように助詞“から”を用いることはできない。

- (50) なああ大吉, おかあさんはやっぱり大吉にただの人間になってもらいたいと思うな。
- (51) 彼に, 裏切りの上に裏切りを重ねてもらいたくないという希望と期待があるからでした。
- (52) *なああ大吉, おかあさんはやっぱり大吉からただの人間になってもらいたいと思うな。
- (53) *彼から, 裏切りの上に裏切りを重ねてもらいたくないという希望と期待があるからでした。

補助動詞モラウを含む文においてその受け手が明確に提示される場合、助詞は“に”あるいは“から”となるが、助詞“に”がかなり自由に用いられるのに対し、助詞“から”が用いられる可能性は限られる。先に見た例でも、“に”は全ての場合に用いられたが、(46)(52)(53)で“から”は使用不可能であった。

助詞“から”の機能は“起点”を示すことである。(柴谷 1978, p.283) 補助動詞モラウは物の授受を表す本動詞モラウから派生したものであり、抽象的な行為の移動を表す。とすると、行為の“起点”としての動作主、つまり比喩的行為の与え手は助詞“から”で示されてもよさそうなものである。ところが行為の起点というだけでは助詞“から”の使用は保証されないことを、(46)(52)(53)の例は示している。

先行動詞部分が表す場面に起点と方向性を持つ動きが存在する時、補助動詞モラウの与え手は助詞“から”により提示され得る。ただし、助詞“から”がつく名詞句は、動きの起点の場所とは限らず、(54)でうさぎを動かした飼い主のように動きを引き起こす物であってもよい。(54)～(60)においては、先行動詞が方向性ある動きを表す。(54)～(57)の先行動詞“出す”“貸す”“送る”“投げる”は物体の移動を伴うから、物理的な方向性を持つ動きを表すと言える。(58)(59)(60)の先行動詞“電話をかける”“教える”“見せる”は言葉や情報の伝わりといったより抽象的なものの方向性ある動きを表している。

- (54) うさぎは飼い主から外に出してもらった
- (55) 太郎は親からお金を貸してもらった
- (56) 姉は福岡の母から辛子めんたいを送ってもらった
- (57) 太郎はフェンスの外にいた人からボールを投げてもらった
- (58) 遅くなる時にはいつも夫から電話をかけてもらった
- (59) 弟はコンパで知り合った女の子から、電話番号を教えてもらって
帰ってきた
- (60) 三原は、ここで安田の妻の書いた文章を医者から見せてもらった
こと、その中に ... が書かれてあったことなどを話した。

(『点と線』, 237)

先行動詞部分が表す場面自体に方向性を持つ動きがなくとも、補助動詞モラウが付加することにより、描写される場面の中に方向性が生まれ、助詞“から”の使用が可能になる場合もある。次に挙げる例(61)(62)(63)は先行動詞部分の“一輪車を買う”“時刻表を書く”“本を読む”だけでは方向性が見られないが、補助動詞モラウが付加することで、“一輪車”“時刻表”“本に書いてある情報”に受け手への方向性が生まれている。

- (61) 花子はおばさんから一輪車を買ってもらった
- (62) 三原は警視庁にかえると、助役から書いてもらった時刻表をしばらく眺めていたが, ...
(『点と線』, 160)
- (63) 太郎は子供の頃、おとうさんから本を読んでもらっていた

先行動詞部分に方向性がないのに、補助動詞モラウが付加されると、記述される場面の中に方向性を持つものが出てくるという事実は、補助動詞が場面についての主観的解釈を表しながらも、場面描写そのものにまで関わっていることを示している。前章で補助動詞ヤルについて論じたと同様、補助動詞モラウは先行動詞の作り出す場面に働いて、場面における方向性という新たな意味を生み出している。

3. 先行動詞と補助動詞の関係について

最後にこれまでの検討の結果を振り返りながら、先行動詞と補助動詞の関係について考察する。

一章では補助動詞ヤルに対する受け手を提示する助詞について、また二章で

は補助動詞モラウに対する与え手（動作主）を提示する助詞について検討したが、どちらの場合にも共通する現象が見られた。すなわち、原則的には先行動詞に対応した助詞が取られるものの、補助動詞が付くことで何物かに与え手から受け手へと移動する方向性が生じると、これに応じて移動の着点、起点を示す助詞が用いられる。ヤル文における着点（受け手）への移動については助詞“に”が、モラウ文における起点（与え手）からの移動については助詞“から”が、これにあたる。

助詞が補助動詞よりも先行動詞部分にまず対応するという事実は、補助動詞ヤル、モラウの受け手、与え手にあたるものが、先行動詞部分の表す場面に存在する物としてまず認識されることを意味する。先行動詞部分が表す客観的場面というものが先に存在し、補助動詞はその場面についての主観的解釈を表すために後から付加されると考えられる。しかし、助詞が先行動詞部分に対応しない場合、補助動詞は場面に主観的解釈を与えるだけでなく、場面の描写そのものに自ら関わっている。補助動詞は先行動詞が描写する場面に主観的解釈を加えながら、その場面に新しい要素を加えている。

補助動詞が、先行動詞の表す場面に物の方向性という新しい要素を加えるメカニズムをここで考察したい。認知言語学における二つの概念がこの考察には有効であると思われる。Lakoff (1987) 等が提唱するイメージ・スキーマと Fauconnier and Turner (1994) が提唱するブレンディングである。

イメージ・スキーマとは、日常の具体的な経験が単なるイメージと言えるほどまでに抽象化されたものである。一旦抽象化されたイメージ・スキーマは、抽象化される前の具体的な経験とは多くの点で異なる経験にまであてはめられ、その理解を助けることになる。新たな経験も旧知のイメージ・スキーマを持つものとして分類され理解されるわけである。

補助動詞ヤル、モラウという表現は図1に示す授受のイメージ・スキーマから生じている。この図は Langacker (1991, p.227) が‘give’に対して描いたものをもとに Yamada (1996, p.125) が多少手を加えたものである。授受のイメージ・スキーマを表す図1において AG (agent) は与え手/動作主, RVR (receiver) は受け手, MVR (mover) は移動するものを示す。⇒は働きかけ, →は移動, 破線—による円は動作主 (AG), 受け手 (RVR) それぞれの所有の領域を表す。

私たちが日常よく経験する、贈り物やおみやげを渡したり受け取ったりという具体的な経験は、実際には毎回どこか異なるが、“物の授受”という一つの行動パターンとして抽象化される。この段階ではまだ本動詞が経験を表現する。

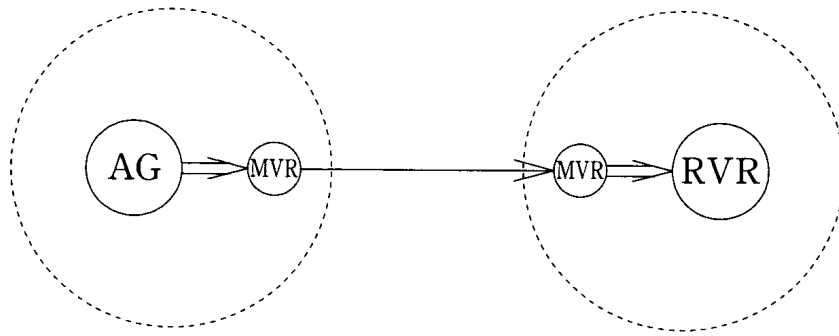


図 1

しかし更に抽象化が進むと、人の意識の中に図1のようなイメージが生まれる。このイメージは物の授受以外の出来事の抽象的側面を捉えるのに利用される。授受の対象が目に見える物体でなくとも、仮に行為であろうとも、何かが二つの地点の間で移動すると捉えられれば、経験は同じ授受のイメージを持つものとして分類され解釈されることになる。補助動詞ヤル、モラウはこの解釈を伝えるものである。補助動詞ヤル、モラウを使う際、話者の頭の中には、描写しようとする経験と、図1で表されるような授受のイメージ・スキーマが、同時に存在する。話者は二つの像を照らし合わせて経験を理解し描写する。

ブレンディングとは、二つの基本的には異なる概念が何らかの類似点により結び付き融合することである。Fauconnier (1994) で結び付けられるのは名詞句を中心とする概念のみであるが、本稿では動詞句を中心とする出来事にもブレンディングの現象が見られると考える。話者の頭の中にある、描写しようとする出来事と授受のイメージ・スキーマもブレンディングを起こす。客観的事実として捉えられる出来事の中には先行動詞部分が表す行為、及び行為の動作主、被動作主が存在する。被動作主とは別に行為の間接的影響を受ける人物が存在することもある。こうした出来事の場面を構成する要素の間に授受に似た関係を見出だす時、話者の頭には授受のイメージ・スキーマが思い浮かぶ。客観的に捉えられる出来事は授受に喩えられ、授受のイメージ・スキーマは出来事にあてはめられる。話者の頭の中にある二つの像、客観的出来事と授受のイメージ・スキーマの間に重なりという力が働き、結果として、話者の頭の中には“授受に似た出来事”という、話者の主観的判断が加わったもう一つの出来事の像が成立する。

出来事が授受のイメージ・スキーマに一方的に重なるだけならば、先行動詞部分の表す行為がそのまま授受のイメージ・スキーマにおける移動するもの(MVR)の部分に入り込むので、先行動詞部分に対応する助詞も補助動詞には

左右されず、先行動詞に対応するもののままとなる。⁴⁾ しかし、授受のイメージ・スキーマも出来事の方に重なろうとする。この時、授受のイメージ・スキーマに含まれる与え手から受け手への方向性は、出来事の中の行為には常に働くが、行為に関わる事物にまで影響を及ぼすことがある。事物が移動不可能である場合、または逆行する方向性が既にある場合を除くと、事物は行為と同一の方向性を与えられることになる。補助動詞が付くことにより生じる事物の方向性は、こうしたブレンディングの作用により初めて説明できる現象である。

聴者の立場からするならば、聴者が補助動詞ヤル、モラウを含む文を聞く時、聴者は先行動詞部分が表す出来事の場面と補助動詞が表す授受のイメージ・スキーマを与えられることになる。聴者の頭の中でも、二つの像はブレンディングを起こす。その結果、主観的判断を与えられた新たな出来事のイメージが、聴者の頭の中にも成立する。授受のイメージ・スキーマが客観的出来事の場面に重なろうとする時、やはり、与え手から受け手への方向性が出来事の場面の中の行為や事物に働き、何らかの事物に行為と同一の方向性が結び付けられることがある。ブレンディングで生まれる事物の方向性が、先行動詞には対応しない助詞の理解を可能にするのである。

本稿の結果は比喩一般の認知機構に一つの仮説を提起するものである。つまり、喩えるものと喩えられるものの関係は一方的なものではなく、双方向から重なり合おうと働き合うものではないかと予想される。この仮説が妥当なものであるか否かについては更なる研究が必要であろう。

4) 吉田 (1971, p.52) による補助動詞の定義に合致する。定義は次の通り。「先行動詞を包摂し、それに対して抽象的・形式的意味を添えるものを補助動詞と呼ぶ」

参考文献

- Fauconnier, Gilles and Mark Turner (1994) *Conceptual Projection and Middle Spaces*. ms. University of California, San Diego.
- Kuno, Susumu (1987) *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*. The University of Chicago Press.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Mouton de Gruyter.
- Maeda, Hiroyuki (1994) A Note on Beneficiary 'NP-ni' Adjunction and 'te yaru' Auxiliary Support in Japanese — Contrasted with Beneficiary Adjunction in English —, 『女子大文学 国文編, 第45巻』 pp.14-28.
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』 大修館
- Yamada, Hitoko (1996) On Japanese Verbs of Giving and Receiving, 『言語文化研究 徳島大学総合科学部, 第3巻』 pp.103-119.
- 吉田金彦 (1971) 『現代語助動詞の史的研究』 明治書院

例文の出典

(1995) 『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』 新潮社 に収集の以下の作品より引用。

赤川次郎 『女社長に乾杯!』

遠藤周作 『沈黙』

壺井栄 『二十四の瞳』

松本清張 『点と線』

野坂昭如 「ラ・クンパルシータ」『アメリカひじき・火垂るの墓』

渡辺淳一 『花埋み』